

武蔵野日曜聖書講筵 復活節

霊身

——マタイ伝第9章、マルコ伝5章、ルカ伝7、24章、ヨハネ伝11章——

1973年4月22日

小池辰雄

聖書というドラマ ヤイロの娘 タリタ、クミ(少女よ、起きよ) 霊身 ナインの若者 天国的現実 ラザロの復活 イエス涙を流したもう 根源現実 イエス目を挙げて言いたもう キリストは自然法爾者 ラザロよ出できたれ エマオ途上のキリスト イエス見えずなり給う キリストは近付いて一緒に歩いて中に入る 平安なんじらに在れ 我が手わが足を見よ 十字架と円現 「主さまー」の一言

【マタイ9】

18 イエス此等のことを語り給うとき、視よ、一人の司^{つかさ}きたり、拝して言う『わが娘いま死にたり。されど来りて御手を之におき給わば活きん』¹⁹ イエス起ちて彼に伴い給うに、弟子たちも従う。²⁰ 視よ、十二年血漏を患いたる女、イエスの後にきたりて、御衣の繸^{ひき}にさわる。²¹ それは、御衣にだに触らば救われんと心の中にいえるなり。²² イエスふりかえり、女を見て言いたもう『娘よ、心安かれ、汝の信仰なんじを救えり』女この時より救われたり。²³ かくてイエス司の家に行たり、笛ふく者と騒ぐ群衆とを見て言いたもう、²⁴ 『退け、少女は死にたるにあらず、寝ねたるなり』人々イエスを嘲笑う。²⁵ 群衆の出されし後、いりてその手をとり給えば、少女おきたり。

【マルコ5】

40 人々イエスを嘲笑^{あざわら}う。イエス彼等をみな外に出し、幼児^{おきな}の父と母と己に伴える者とを率^ひきつれて、幼児のおる処に入り、⁴¹ 幼児の手を執^とりて『タリタ、クミ』と言いたもう。少女よ、我なんじに言う、起きよ、との意なり。⁴² 直ちに少女たてち歩む、その歳十二なりければなり。

【ルカ7】

11 その後イエス、ナインという町にゆき給いしに、弟子たち及び大なる群衆も共に往く。¹² 町の門に近づき給うとき、視よ、昇^かき出^いさるる死人あり。これは独息子^{ひとりこ}にて母は寡婦^{やもめ}なり、町の多くの人々これに伴う。¹³ 主、寡婦を見て憫^{あわれ}み『泣くな』と言いて、¹⁴ 近より柩^{ひつぎ}に手をつけ給えば、昇^かくもの立ち止る。イエス言いたもう『若者よ、我なんじに言う、起きよ』¹⁵ 死人、起きかえりて物言い始む。イエス之を母に付^{わた}したもう。¹⁶ 人々みな懼^{おそ}れをいただき、



神を崇めて言う『大なる預言者われらの中に興れり』
【ルカ24】

13 視よ、この日二人の弟子、エルサレムより三里ばかり隔りたるエマオという村に往きつつ、¹⁴ 凡て有りし事どもを互に語りあう。 ¹⁵ 語りかつ論じあう程に、イエス自ら近づきて共に往き給う。 ¹⁶ されど彼らの目遮えられて、イエスたるを認むること能わず。 ¹⁷ イエス彼らに言い給う『なんじら歩みつつ互に語りあう言は何ぞや』かれら悲しげなる状にて立ち止り、¹⁸ その一人なるクレオパと名づくるもの答えて言う『なんじエルサレムに寓り居て、独り此の頃かしこに起こりし事どもを知らぬか』¹⁹ イエス言い給う『如何なる事ぞ』答えて言う『ナザレのイエスの事なり、彼は神と凡ての民との前にて、業にも言にも能力ある預言者なりしに、²⁰ 祭司長ら及び我が司らは、死罪に定めんとて之を付し遂に十字架につけたり。 ²¹ 我らはイスラエルを贖うべき者は、この人なりと望みいたり、然のみならず、此の事の有りしより今日にはや三日めなるが、²² なお我等のうち或女たち、我らを驚かせり、即ち彼ら朝風く墓に往きたるに、²³ 屍体を見ずして帰り、かつ御使たち現れて、イエスは活き給うと告げたりと言う。 ²⁴ 我らの朋輩の数人もまた墓に往きて見れば、正しく女たちの言いし如くにしてイエスを見ざりき』²⁵ イエス言い給う『ああ愚にして預言者たちの語りたる凡てのことを信するに心鈍き者よ。 ²⁶ キリストは必ず此らの苦難を受けて、其の栄光に入るべきならずや』²⁷ かくてモ―セ及び凡ての預言者をはじめ、己に就きて凡ての聖書に録したる所を説き示したもう。 ²⁸ 遂に往く所の村に近づきしに、イエスなお進みゆく様なれば、²⁹ 強いて止めて言う『我らと共に留まれ、時夕に及びて、日も早や暮れんとす』乃ち留らんとて入りたもう。 ³⁰ 共に食事の席に著きたもう時、パンを取りて祝し、擘きて与え給えば、³¹ 彼らの目開けてイエスなるを認む、而してイエス見えずなり給う。 ³² かれら互に言う『途にて我らと語り、我らに聖書を説明し給えるとき、我らの心、内に燃えしならずや』³³ かくて直ちに立ちエルサレムに帰りて見れば、十一弟子および之と偕なる者あつまり居て言う、³⁴ 『主は実に甦えりて、シモンに現れ給えり』³⁵ 一人の者もまた途にて有りし事と、パンを擘き給うによりてイエスを認めし事とを述ぶ。 ³⁶ 此等のことを語る程に、イエスその中に立ち『平安なんじらに在れ』と言い』給う。 ³⁷ かれら怖じ懼れて、見る所のものを靈ならんと思いに、³⁸ イエス言い給う『なんじら何ぞ心騒ぐか、何ゆえ心に疑惑おこるか、³⁹ 我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、霊には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見るごとし』⁴⁰ 『斯く言いて手と足とを示し給う』⁴¹ かれら歡喜の余に信せずして怪しめる



時、イエス言いたもう『此処に何か食物あるか』⁴²かれら炙りたる魚一片を捧げれば、⁴³之を取り、その前にて食し給えり。

⁴⁴また言い給う『これらの事は我がなお汝らと偕に在りし時に語りて、我に就きモーセの律法・預言者および詩篇に録されたる凡ての事は、必ず遂げらるべしと言ひし所なり』⁴⁵ここに聖書を悟らしめんとて、彼らの心を開きて言い給う、⁴⁶『かく録されたり、キリストは苦難を受けて、三日めに死人の中より甦えり、⁴⁷且その名によりて罪の赦を得さす悔改はエルサレムより始まりて、もろもろの国人に宣伝えらるべしと。⁴⁸汝らは此等のことの証人なり。⁴⁹視よ、我は父の約し給えるものを、汝らに贈る。汝ら上より能力を著せらるるまでは都に留まれ』

【ヨハネ11】

¹爰に病める者あり、ラザロと云う、マリヤとその姉妹マルタとの村ベタニヤの人なり。²此のマリヤは主に香油をぬり、頭髮にて御足を拭いし者にして、病めるラザロはその兄弟なり。³姉妹ら人をイエスに遣して『主よ、視よ、なんじの愛し給うもの病めり』と言わしむ。⁴之を聞きてイエス言ひ給う『この病は死に至らず、神の栄光のため、神の子のこれに由りて栄光を受けんためなり』⁵イエスはマルタと、その姉妹と、ラザロとを愛し給えり。⁶ラザロの病みたるを聞きて、その居給ひし処になお二日留り、⁷而してのち弟子たちに言い給う『われら復ユダヤに往くべし』⁸弟子たち言う『ラビ、この程もユダヤ人、なんじを石にて撃たんとせしに、復かしこに往き給うか』⁹イエス答えたもう『一日に十二時あるならずや、人もし昼あるかば、此の世の光を見るゆえに躡くことなし。¹⁰夜あるかば、光その人になき故に躡くなり』¹¹かく言ひて復その後い給う『われらの友ラザロ眠れり、されど我よび起こさん為に往くなり』¹²弟子たち言う『主よ、眠れるならば癒ゆべし』¹³イエスは彼が死にたることを言ひ給ひしなれど、弟子たちは寝ねて眠れるを言ひ給うと思えるなり。¹⁴爰にイエス明白に言ひ給う『ラザロは死にたり。¹⁵我かしこに居らざりし事を汝等のために喜ぶ、汝等をして信ぜしめんとてなり。然れど我ら今その許に往くべし』¹⁶デドモと称うるトマス、他の弟子たちに言う『われらも往きて彼と共に死ぬべし』

¹⁷さてイエス来り見給えば、ラザロの墓にあること、既に四日なりき。¹⁸ベタニヤはエルサレムに近くして、二十五丁ばかりの距離なるが、¹⁹数多のユダヤ人、マルタとマリヤとをその兄弟の事につき慰めんとて来れり。²⁰マルタはイエス来給うと聞きて出で迎えたれど、マリヤはなお家に坐し居たり。²¹マルタ、イエスに言う『主よ、もし此処に在ししならば、我が兄弟は死な



ざりしものを。²²されど今にても我は知る、何事を神に願ひ給うとも、神は与え給わん』²³ イエス言い給う『なんじの兄弟は甦えるべし』²⁴ マルタ言う『おわりの日、復活のときに甦えるべきを知る』²⁵ イエス言い給う『我は復活なり、生命なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。²⁶ 凡そ生きて我を信ずる者は、永遠に死なざるべし。汝これを信ずるか』²⁷ 彼いう『主よ然り、我なんじは世に来るべきキリスト、神の子なりと信ず』²⁸ かく言いて後ゆきて窃にその姉妹マリヤを呼びて『師きたりて汝を呼びたもう』と言う。²⁹ マリヤ之をきき、急ぎ起ちて御許に往けり。³⁰ イエスは未だ村に入らず、尚マルタの迎えし処に居給う。³¹ マリヤと共に家に居りて慰め居たるユダヤ人、その急ぎ立ちて出でゆくを見、かれは歎かんとて墓に往くと思いて後に随えり。³² 斯てマリヤ、イエスの居給う処にいたり、之を見てその足下に伏し『主よ、もし此処に在ししならば、我が兄弟は死なざりしものを』と言う。³³ イエスカれが泣き居り、共に来りしユダヤ人も泣き居るを見て、心を傷め悲しみて言い給う、³⁴ 『かれを何処に置きしか』彼ら言う『主よ、来りて見給え』³⁵ イエス涙をながし給う。³⁶ 爰にユダヤ人ら言う『視よ、いかばかり彼を愛せしぞや』³⁷ その中の或者ども言う『盲人の目をあけし此の人にして、彼を死なざらしむること能わざりしか』³⁸ イエスまた心を傷めつつ墓にいたり給う。墓は洞にして石を置いて塞げり。³⁹ イエス言い給う『石を除けよ』死にし人の姉妹マルタ言う『主よ、彼ははや臭し、四日を経たればなり』⁴⁰ イエス言い給う『われ汝に、もし信ぜば神の栄光を見んと言いしにあらずや』⁴¹ ここに人々、石を除けたり。イエス目を挙げて言いたもう『父よ、我にきき給いしを謝す。⁴² 常にきき給うを我は知る。然るに斯く言うは、傍らに立つ群衆の為にして、汝の我を遣し給いしことを之に信ぜしめんとなり』⁴³ 斯く言いてのち、声高く『ラザロよ、出で来たれ』と呼ばわり給えば、⁴⁴ 死にしもの布にて足と手とを巻かれたるまま出で来る、顔も手拭にて包まれたり。イエス『これを解きて往かしめよ』と言い給う。

●聖書と「道」

聖書は教えの本ではない。私は、「キリスト教」と言わないで、「キリスト道」と言っている。漢訳聖書には、ヨハネ伝の1章1節が、

「太初に言あり」

ではなく、

「太初に道あり」

と書いてある。この「道」という字は漢文では「いう」という。「言」と通ずる字でもある



わけですが。昔の訳ではやはり、「道あり」と訳してある。漢文の聖書というのは、非常に昔の訳に参考になった基礎のひとつなんです。

そういったわけで、キリスト道ですね。それから、聖書はドラマであるので、教訓の本でも何でもありません。これほど面白いドラマはないんですからどうぞ、聖書というドラマをよく身読しんどくしていただきたい。身で読んでいただきたい。今日の題は「霊身」と書いた。そもそも、聖書に対する第一の態度は——研究なんかでわかるものではない——からだで、全存在で読んでいただきたい。新しい方も、どうぞ、そういった気持ちでぶつかってください。これほど面白い本はない。特に、劇中の劇はこの福音書なんです。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書は、何といっても、キリストずばりのところで、聖書の始めて終りあります。ちように、釣りでいうと、鮒釣りが始めて終りのように、聖書は福音書が始めて終りです。

●ヤイロの娘

今日はもちろん、キリストの復活というわけですが、キリストの復活の前哨としまして、マタイ伝9章、ヤイロの娘の甦りのところをちよつと読みましょう。9章18節に、

18 イエス此等のことを語りい給うとき、視よ、一人の司つかさきたり、拜して言う

跪いて言うのに、

『わが娘いま死にたり。されど来りて御手を之におき給わば活きん』

なかなかこの司はキリストに対する信頼が全的である。死んだのに、手を置いてくだされば活きると。

19 イエス起たちて彼に伴い給うに、弟子たちも従う。

そうすると、そこに挿話が入ってくる。

20 視よ、十二年血漏を患いいたる女、イエスの後にきたりて、御衣ひその総ひらにさわる。21それは、御衣にだに触らば救われんと心の中にいえるなり。

十二年血漏を患いいたる女が、キリストに、衣に触れば、もうそれで治ると思ったので、衣に触ったところが、キリストの力がそこから出た。それで、

22 イエスふりかえり、女を見て言いたもう『娘よ、心安かれ、汝の信仰なん

じを救えり』

「心安かれ」は「平安あれ」ということです。私が非常に好きな言葉はこの「平安」という言葉なんです。手紙の表にもよく書きますが、

「平安があなたにあるように」

という意味で、「平安」と書く。

「汝の信仰なんじを救えり」

とある。



「お前は私の衣に触れば、助かると思った。その信仰が救いのもとになった」と。信仰が救ったのではないですよ。救ったものはキリストの力です。キリストの力が救ったんだが、そのキリストの力を無条件に受けとったということが救いの契機になったという。まあ少し分解していえば、そういうことなんです。

「汝の信仰なんじを救えり」というと、

「それでは、ひとつ信仰を強くしなければ」

と、一生懸命で信仰そのものを強くしようと思う。なにか信念かと思つてね。これがよくクリスチャンが間違いをする。そんなこわばったらダメですよ、固くなったら。信仰というのは、相手のキリストが素晴らしいということ。

「キリストはもの凄いいひとだ。こっちはもう何でもない」

と言つて、幼児の如く楽な気持ちで受けとることが信仰です。いわゆる信仰ではないから、そこをキリストの言葉に躓かないようにしてください。

女この時より救われたり。

という挿話があります。それから更に、

²³ かくてイエス司の家にいたり、笛ふく者と騒ぐ群衆とを見て言いたもう、

²⁴ 『退け、少女は死にたるにあらず、寝ねたるなり』

「なに、そんなにうろたえ騒ぐか。死んだのではないぞ、寝たんだ」と。

人々イエスを嘲笑う。

「死んだのに、寝たなんて言うものだから、とんでもない」

と言つて、あざ笑つたと。そのまま非常にドラマチックでしょ、劇的でしょ。だから、私はドラマだと言う。そのドラマの中に自分を突入して読んでください。もし、今日、新しい人がいらつしやるとすれば、直ちにその世界に入れるんですから。

「何年来なければどうだ」

なんて、そんなことはひとつもない。

²⁵ 群衆の出されし後、いりてその手を取り給えば、少女おきたり。

その少女の家に入つて行つて、その手をとつたら少女が起きたと、非常に簡単に書いてある。

●タリタ、クミ（少女よ、起きよ）

マルコ伝には詳しく書いてある。5章40節のところに、

「40 人々イエスを嘲笑う。イエス彼等をみな外に出し、幼児の父と母と己に伴える者とを率きつれて、幼児のおる処に入り、

その少女のいる所に入つて、



41 幼児の手を執りて『タリタ、クミ』
 「タリタ、クミ」とはアラミ語で、キリストの使っていた方言、母語です。「クミ」というのは「起きよ」、「タリタ」というのは「少女よ」ということ。

と言いたもう。少女よ、我なんじに言う、起きよ、との意なり。」(マルコ5・40〜41)

「我なんじに言う」というのは註解です。「少女よ、起きよ」ということ。まあ女の方々はこの、

「タリタ、クミ(少女よ、起きよ)」

という、キリストの一番じかじかな言葉をすっかり覚えておくといい。いろんなことでへこたれたりする時に、キリストが「タリタ、クミ」と仰るから、立ち上がっていける。

42 直ちに少女たてち歩む、その歳十二なりければなり。

「起きよ」という。

「目覚めよ、起きよ!」

と。人間はこうやって立っている姿が即ち、起きている姿ですが。身体ばかりでなくて、心が、魂が本当に目覚め起きていなくてはいかん。この、

「タリタ、クミ(少女よ、起きよ)」

という言葉をよく銘記していただきたい。

万物が今、冬の眠りから起き目覚めている。太陽の光、光熱によって春にはみな、太陽の光熱自身が、

「起きよ!」

と言って、このように花咲かせているわけです。「スプリング」という言葉がそういった意味で、非常に跳ね上がるような言葉ですが。

「めさめよ、わがたま(讚美歌370番)」

という讚美歌もありますけれども。寝ていても、眠っていても、魂がいつでも起きられる。あるいは、眠りの中での凄く魂が目覚まされて、示されることも私は経験しますけれども。

キリストに——太陽の光、光熱ではなくて——キリストの生命に、光に起こされる。

人間は、「死への病」なんていつて、相対的な意味では我々は何年かたつたら死ななくてはいかん。そういう意味においては、死なざるを得ないようにできている。

「すべての人は死ななければならぬ」

なんていう。「死の眠り」とかい。私は、

「キリストというひとは大生命のひとつである」

と言う。この宇宙にみなぎるところの、生命の焦点。燃えているところの、生命の燃焼してやまず、光熱の燃焼してやまざるところの実体が、我々の見ているところでは、この太陽でしょうが。それから、諸々のそういった星が宇宙には氾濫している。神の大生命を本



当に彼は天界において既に実存していた。それがナザレのイエスという人物において、この大生命が結晶して顕れた。福音書におけるところの、キリストの言葉、行為、一切の在り方がこの大生命の様々な顕現であります。この大生命が本当の霊生という——霊的な生命ですね——この霊の大生命というものです。

もっとクリスチャンはこのキリストに気がつかなくてははいかん。もう寝ぼけたような、くすぶつたようなクリスチャンなんてものは、そんなのはクリスチャンではない。我々の現実がどんなに波をうとうが、行き詰まろうが、失敗しようが、ぶつ倒れようが、このキリストの大生命の中に、これを受けとらなかつたら、信仰なんていつたつてつまらない。

キリストが、この「タリタ、クミ」と言われるような、そういった言葉は大生命のもの、凄い発動なんです。言葉に爆発しているんだ。ですから、

「わが言は霊なり、生命なり」

と言われたでしょ。その少女はその死から甦ってしまふ。もうキリストが手を取っただけでも、もうグーツときてます。その手の行為と言葉によって少女は甦った。

● 霊身

私たちが日常生活においてこの「クミ」「起きよ」という言葉でもって、豁然と目覚め、その生命の中に入っていく。これが我々がこのヤイロの娘ではたと受けとらなければならぬ事態です。これがキリストの——それではその大生命の質は何かというところ——愛の本願であります。

「空くうの空なるかな。すべて空なり」

という。それはもし、人生が死で終るならば、墓場が終局点であるならば、これほど空しいことはない。流転無常なんだな。

けれども、そうではない。死んでも死なない、生命を今、現に、我々が日常において本当に受けとつていなかつたら、これほど本当につまらないものはない。これは神の愛、キリストの愛の本願がかくさせる。愛の本願は、その生命は、人に生命を与えるということが愛の一番深い内容です。私たちが死から救い上げて生命の世界に入れるということは、これは愛のほか何ものでもない。

神の愛、キリストの愛のほかこれはできないんです。私たちがどんなに人のために同情しようが、どうしようが、ひと一人のひとを活かすわけにいかない。どんなお医者さんがきても、生命を与えることはできない。生命を与えるものは、この生命を本来付与したところの神さまがこの「永遠の生命」の中に入れる。

聖書は、何のためにこの福音書があるか。天国即ち、永遠の生命の事態、それを人々に与えるためです。それはいかなる哲学があろうが、いかなる文学があろうが、何があろうが、人間のつくりだしたいかなるものも、人ひとりの人を生命づけるわけにいかない。



万人は宗教を要する。万人は救いを要するんです。

「諦める」^{あきら}

なんていうのは誤魔化しだよ。本当は、みな本当に生きてありたい。誰も死を喜ぶものはない。死ねばみな悲しむ。なぜ、悲しむんですか。死というものは、相対的現実においては、一番深刻な現実ですから。その死という現実をぶち破るもの、これがキリストなんです。神の大生命を身につけていたひと。これが本当の霊身のひとなんです。それはただ霊体というのと違う。霊体という、今の肉体に対する霊体ではなくて、

「霊身」

と私は特に今日書いたのは、そういった霊的な心身一如の実体を今、「霊身」と書いた。

そういうわけで、キリストの愛の本願がこのヤイロの娘を甦らせた。ヤイロの娘はそのうちにまた死んだでしょう。けれども、この現実においてキリストがかくの如き生命を与えるものであることの、ひとつのこれは徴ですから。象徴なんです。象徴と云って、觀念の象徴ではない。現実をもつてするところの、相対的な現実に顕れた絶対現実の徴なんです。相対的な現実に顕れた絶対の生命の徴がこのヤイロの娘の甦りの、「タリタ、クミ」におけるところの事態である。

神の事態はすべて、私たちのこの相対的現実において絶対なものが顕れている。その最たるものがイエス・キリスト自身です。それがみんな見えない。だから、弟子たちも、いわんやユダヤ教の連中もみんな躓いてしまった。研究なんていう世界ではないですよ。本当に降参して、その中に自分を投げ入れなければ。降参して投げ入れたら、本当にその世界に入る。

● ナインの若者

その次は、ナインの若者のところ。ルカ伝7章。この記事はルカ伝しか書いてない。さっきのはマタイ、マルコ、ルカ、全部に出ている。11節から、

「11その後イエス、ナインという町にゆき給いしに、弟子たち及び大なる群衆

も共に往く。12町の門に近づき給うとき、視よ、昇き出さるる死人あり。こ

れは独息子にて母は寡婦なり、町の多くの人々これに伴う。13主、寡婦を見

て憫み『泣くな』と言いて、14近より柩に手をつけ給えば、昇くもの立ち止る。

何をするのだろうと思ってね、

イエス言いたもう『若者よ、我なんじに言う、起きよ』

ここでも「起きよ」だ。こっちは今度は男の子だ。まあ大変なひとですよ。こういうドラマを見て——人間のつくったドラマではなく、このドラマは驚くべき現実なんだ——私とはかくこの福音書を開くと、もうそれで楽しくなってしまう。どんな時でも福音書を開くと、もうたまらない。



と言われた。

「汝らは私を本当に受けとつてごらん。お前たちを通して驚くべきことをするぞ」という。

「大いなることをなさんなんて、とてもできません」

なんて、おじけることはない。

「できませんから、どうぞ、あなたがやつてください」

と言つて、全托してかかる。まあ親鸞なんていう坊さんも、あれはもうしようがないんだよ、自分がね。けれども、仕方がないからもう、弥陀の本願というものに完全に自分を全托した。そこにあの浄土真宗の素晴らしいところがでてきた。

15 死人、起きかえりて物言い始む。イエス之を母に付したもう。16 人々みな

懼をいだし、神を崇めて言う『大なる預言者われらの中に興れり』(ルカ

7・11〜16)

預言者どころのさわぎではないから。旧約にたくさん預言者が出ました。第二イザヤがあのイザヤ書35章であれだけのことを謳っているけれども、それは霊的な示して謳ったんだらうけれども、その旧約の預言者たちのそういった天国的現実をまざまざと示したのがこのキリストですから。まさに預言者の成就です。

一切の預言者はキリストというこの大きな湖に注ぎこんでいる。それからこの湖からもろもろの川がまた流れ出しているわけだ。これが使徒たち。預言者たちは注ぎこむところの川であり、その湖から流れ出るものが使徒たち。私たちもその使徒たちの、使徒的信仰者のひとつの枝として、流れとしてキリストの大湖から発している。この湖は預言者の水ばかりではないよ。湖の中にちゃんと泉がある。滾々と湧き出る泉がある。霊泉が湧き出て、そして大きなキリストという湖になる。いろいろな預言者の流れが来ている。それからまた出て行く。まあそんなようなわけだ。

だから、こういう具体的な事態を見て、ナインの若者が葬式の、担いで行かれるその途中ででもって押さえてしまう。そういうことがちゃんと見えるひとなんです。自分は死人を甦らせる。死に定められたすべての人たちに本当の生命を与える。そのこと——言葉ではない——事実をもつてするところの証明である。キリストほどの証明はできない。彼自身が決して死なないところの生命を持つていた。

「キリストはどういうように復活したか」

なんて、そんなことを詮索することはひとつもない。キリストはもう復活せざるをえないひとなんです。十字架の贖罪の大業を果たせば、あとは今までのナザレのイエスどころでない、もつと凄い生命体として彼は現れざるをえない。



●ラザロの復活

それから、ラザロの復活です。このヤイロの娘とナインの若者とラザロの三つの甦りの事態はキリストの復活の前哨として忘れることのできない三つの例です。ヨハネ伝11章に、

「¹爰に病める者あり、ラザロと云う、マリヤとその姉妹マルタとの村ベタニヤの人なり。

マルタとマリヤは非常にキリストと親しかったですから。

²此のマリヤは主に香油をぬり、頭髮にて御足を拭いし者にして、病めるラザロはその兄弟なり。

香油というのは、女性がしょっちゅう、皆さんでもお使いになるわけですが。なにもこの場合に限らないでしょうけれども。

⁵イエスはマルタと、その姉妹と、ラザロとを愛し給えり。
この「愛する」は「アガパオー」という字が使つてある。

¹¹……いい給う『われらの友ラザロ眠れり、されど我よび起さん為に往くなり』

キリストはこの時も、死んでいると言っているのに、「眠っている」と。これを「よび起すため」に行くんだと言う。

¹²弟子たち言う『主よ、眠れるならば癒ゆべし』¹³イエスは彼が死にたることを言い給いしなれど、弟子たちは寝ねて眠れるを言い給うと思えるなり。

イエスはあらわに今度は言いたもう。実はそうじゃないと。

¹⁴爰にイエス明白に言い給う『ラザロは死にたり。
もう三日もたっているんですからね。』既に四日なりき」と。

¹⁵我かしこに居らざりし事を汝等のために喜ぶ、汝等をして信ぜしめんとてなり。然れど我ら今その許に往くべし』

神さまの大生命を受けとらせんがために行くのだと。

²⁰マルタはイエス来給うと聞いて出で迎えたれど、マリヤはなお家に坐し居たり。²¹マルタ、イエスに言う『主よ、もし此処に在ししならば、我が兄弟は死なざりしものを。』²²されど今にても我は知る、何事を神に願ひ給うとも、

神は与え給わん』

まあそう言つたわけだね。

²³イエス言い給う『なんじの兄弟は甦えるべし』²⁴マルタ言う『おわりの日、

復活のときに甦えるべきを知る』

終りの日にと。この世の終りにね。大体、このユダヤ教ではそういうようにみな考えていたわけです。そして、甦つて、善なる者は天国に、悪なる者は地獄に行く。



●我を信ずる者は永遠に死なざるべし

25 イエス言い給う『我は復活なり、生命なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。

26 凡そ生きて我を信ずる者は、永遠に死なざるべし。汝これを信ずるか』

「おおよそ生きて我を信ずる者は永遠に死なない」と言う。

「死んでもそれは死ではないぞ」

ということです。相対的な意味における生でも死でもない。これは次元の違った生なんです。キリストが神を信じていたということは、

「神さまのこの大生命を本当に受けとっていた」ということですよ。

「神さまの存在を信じていた」

なんていう、そんな呑気なものではない。普通、

「神は在るかないか、神を信ずるか?」

なんて言っただけ、たとえ「在ると信じた」ところで何になるんですか。そんなことではない。即ち、

「信ずるとは、その実在に連なる、受けとること」

なんです。「信ずる」という言葉が、ある意味において非常に躓きになるので、私はいつも「信受」と言わなくてはダメだという。これは仏教でも「信受」という言葉がある。

「我は復活なり、生命なり」

と。いわゆる相対的な死から本当の生命の世界に、永遠の生命の世界に帰すことが復活なんです。ただ息を吹き返したなんて、そんなものではない。復活ということは即ち、本当の真の大生命の、ひとつの現象であるにすぎない。復活ということは何か非常に驚いたりするけれども、本当の大生命というのはそういうように現象せざるを得ない。だから、

26 凡そ生きて我を信ずる者は、永遠に死なざるべし。汝これを信ずるか』

「凡そ生きて我を受けとる者は、永遠に死なない。汝これを本当に受けとるか」と。

27 彼いう『主よ然り、我なんじは世に来るべきキリスト、神の子なりと信ず』

なにか少し神学的な答えだ。

28 かく言いて後ゆきて窃にその姉妹マリヤを呼びて『師きたりて汝を呼びたもう』と言う。29 マリヤ之をきき、急ぎ起ちて御許に往けり。30 イエスは未

だ村に入らず、尚マルタの迎えし処に居給う。31 マリヤと共に家に居りて慰め居たるユダヤ人、その急ぎ立ちて出でゆくを見、かれは歎かんとて墓に往くと置いて後に随えり。32 斯てマリヤ、イエスの居給う処にいたり、之を見

てその足下に伏し『主よ、もし此処に在ししならば、我が兄弟は死なざりしものを』と言う。



同じようなことを言った。その点、マリヤもマルタも同じようなわけです。「居てくださればよかつたのに、ちよつとこれ遅かつたですよ」と。

● イエス涙を流したもう

³³ イエスがかれが泣き居り、共に来りしユダヤ人も泣き居るを見て、それは深刻だよ、何といったつて。死んでるんだからね。みんな泣いているわけだ。

心を傷め悲しみて言い給う、

「心を傷め悲しみて」という訳がちよつとあまりふさわしくないんですけどね。心にあるひとつの憤り、聖なる憤りを感じて、心を動かして言いたもう。

³⁴ 『かれを何処に置きしか』彼ら言う『主よ、来りて見給え』³⁵ イエス涙をながし給う。

そこはまたキリストの、まあ、いいところと言つたらおかしいけれども。イエスというひとは、笑うときには笑う。泣くときには泣く。一緒にその同じ気持になつてくださるわけです。同じ気持になつて、それきりだったら、これはどうにもならん。同じ気持になりながら、そこから今度は、救いあげてしまふ。

「イエス涙を流したもう」

というのは、いかにも「メンシユリツヒカイト」、本当の「人間性」だな。ゲエテの言葉に、「あらゆる人間的な欠陥、それは純なる人間性がこれを贖いとる」

とある。ゲエテという人は、よく宗教的な境地と、そういつた本当に人間的なものを渾然^{こんぜん}としてつかまえることのできる人なんです。キリストの「純なる人間性」がここにも表れている。本当の人間性が。人間性のない、何か方程式みたいな人はダメですよ。そういつた、泣くときには泣きき、笑うときは笑う。けれども、それは本当にその現実を共感し、享受しながら、それから救いあげる。

³⁶ 爰にユダヤ人ら言う『視よ、いかばかり彼を愛せしぞや』

この「愛せしぞ」は、さつきのと違ふ字が、「フィレオー」という字が使つてある。この場合、人間的に愛するということの意味です。キリストは、キリストの愛だつて、人間的な愛と、それから非常に天的な愛と、やはり渾然としていて。分析なんかできない。しかし、いつも中心になつているのはもちろん天的な愛ですけれども。こないだ私は、『ハレルヤ』³⁰号に書いたでしょ。あの一節は非常に大事な一節ですから。

「一般にアガペーというと、単に天的な霊的な精神的な愛と思われ、地的な愛エロースと天地のへだたりがあるように考えられている。しかし本当のアガペー愛はエロース愛の次元にまで深く降りてきて

キリストがやっぱり一緒に泣くわけだ。

罪を犯す危険性をもつたエロース愛を包んでこれをアガペー愛の中に溶かしこんで変



質させる力をもったとんだ底の愛である。」

キリストというのはいさういうひとです。相手がどんな人であろうと、その場に入っていて、そいつを救いあげてしまう。

「あれはちよと無理だ」

なんてことはない。ただ、聖霊に逆らう者だけは困る。それは打ち倒す。打ち倒して、彼が目覚めれば、

「悪かった」

と言って平伏せば、それは救い給う。その点で例外はないわけです。

37 その中の或者とも言う『盲人の目をあけし此の人にして、彼を死なざらしむること能わざりしか』

「盲人の目はあけるひとだったが、死人だけは無理だったな」なんて。

● 根源現実

38 イエスマた心を傷めつつ墓にいたり給う。

「心を傷め」というのは、心にあるひとつの憤りの気持をもって、「傷める」というのはそういう気持です。

墓は洞にして石を置きて塞げり。39 イエス言い給う『石を除けよ』死にし人

の姉妹マルタ言う『主よ、彼ははや臭し、四日を経たればなり』40 イエス言

い給う『われ汝に、もし信ぜば神の栄光を見んと言いしにあらざるや』41 こ

に人々、石を除けたり。イエス目を挙げて言いたもう

「目を挙げて」というのは霊界を見ることです。霊界の神に目を注ぐということです。

『父よ、我にきき給いしを謝す。』

「きき給う」ではなくて、「きき給いし」といつて完了なんだ。まだことが始まっていないのに、「きき給いしを」と言うんですから、ここらもうキリストの信仰がもの凄い信仰であることがわかる。相対的現実を既にもつと深い現実で受けとってしまっている。だから、私はそれを絶対現実、根源現実というんです。根源現実を受けとっている世界なんです。根源の現実です。それは相対の世界で、あるいはそのときに現象しないかもしれませんよ。しないからといって、それでへこたれたらダメですよ。イエスは、もうほとんどそれが相即して顕れているわけです。相手がしようがないときには、顕れないこともあったけれどもね。キリストはもう常に根源現実を直ちに相対現実現象するようなひとだった。我々の場合は、相対現実現象しない場合がいくらでもある。けれども、どうぞ、この根源の現実で受けとってください。いわゆる御利益信仰はこの相対にばかり気がとられている。

「さあ、それがどうなるだろうか、ああなるだろうか」と言っ



「ああ、こうなった」

といって今度は現象を喜んでいる。それはいわゆる御利益^{ごりやく}信仰。もうひとつ奥の根源現実を受けとっている信仰は、相對現実のプラス・マイナスにかかわらず、本当の前進をしていく。だから、その人は死んでも死なない。相對的現実^{ごりやく}は、死ということにくるよ、我々もけれども、死なない。根源現実が既にその人に成っているから。普段、そこまで本当に祈りの世界で受けとつていかないと。また、実存の世界でそれを自分で体験していかないとね。それはもう、キリストの根源現実なる、実体^{じたい}なるキリストを受けとつていいるからね。

●イエス目を挙げて言いたもう

41ここに人々、石を除けたり。イエス目を挙げて言いたもう『父よ、我にきき給いしを謝す。42常にきき給うを我は知る。』

凄いね、

「常に聞き給う」

という。これまた間違えては困るですよ。我々は、お願いがまちがっていることもあるかもしれないよ。そのまちがったお願いを、聞かれなかつたりしたら、なんのканのと。そうじゃない。お願いが聞かれたなかつたら、

「願以上の願いが聞かれています」

と、こうこなくてはいかん。我々の願いは悲願だよ。悲願以上の本願が、本願は常にこの悲願を受けとつて、

「悲願以上のもので本願は聞いてくださる」

と。問題ないじゃないですか、そうなつたら。これだけの世界に入つてしまうと、人は誤解するかもしれないよ。

「あの野郎はどうだこうだ」

なんて。誤解されれば誤解されるほど、私は本ものだということがわかるわけです。

そういった相對のプラス・マイナスの奥の世界の本當のプラスの世界。これが本當の信仰なんです。キリスト一切。だから、これを私は——この頃の自分の好きな言葉の——「本願道」と言う。

「ただこの本願道を行くのみ」

というのがそのことです。躓いても転んでも滑つても倒れても、この本願道を行くのみ。

「でも、お前はこうじゃないか、ああじゃないか」

と、いくらでも仰つてください。そんなことに関わりないから。そういうようなこの本願道を行くのみ。もういつもその中に自分が消えていくんだ。突入していく。姿が見えない。

「小池なんてはこういう者だ」

と定義したら、それは間違いだよ。定義できないんだ、私は。



イエスというひとは定義できない。とにかく、第一流の人物というものは——私は自分を第一流なんて言っているんじゃないけれども——定義できない。説明もできない。これはゲーテも『ファウスト』の中で言っている。なぜ、ゲーテ研究や、シェイクスピア研究がいくらでもできるかというと、彼らは定義のできないようなところに入っているものだから、あつちから見たり、こつちから見たりして、いろんなことを言っているだけではないです。ダイヤモンドみたいだから、こつちから見ると紫に光って、あつちから見ると黄色く光ってね。ところが、自分は無色透明なんです。そういう意味において、ダイヤモンドというのは素晴らしい。もの凄い光を発する。無色無限色です。無色無限色のような人になったら、これはみんな本ものになる。

「何々教でなければいかん」

なんてことはない。だから、

「私は、プロテスタントでもありません。カトリックでもありません」

「では、お前は何だ」

「キリストに直結しているんだ」

と、はつきり言う。

「では、歴史を無視するのか」

と。そうじゃないですよ。歴史を無視するわけではないけれども。我々は、「武蔵野幕屋」というひとつの集会で、こういったひとつの特殊な存在だよ。けれども、そんなものに決して執着なんかしてやしない。有れども無きがごときやつだ。そういう、

「有れども無きがごときやつだ」

と、パウロが言っているような自在なものです。

●キリストは自然法爾者

「自然法爾しねんほうに」という言葉を知っているかな。私の大好きな言葉なんだ。

「自ずから具わって然りなるものであって、諸々の法が、ダルマが自在にその中に

具わっている」

ことを「自然法爾」という。

出エジプト記3章の有名なところに、

「我は有りて在るもの」

とある。私はこれを、

「我は有りて在らしむるもの」

と訳すと言った。ところが、漢文の聖書では何と書いてあるか。

「我は自然にして然るものなり」

と書いてある。私はこれを読んで、うれしくてしょうがない。漢文というものは実に味が



ある。そして、あとの方に

「我在りというもの」

と書いてあるでしょ。これは、

「我自然者」（我自然なる者）

と書いてある。神さまは「我自然者」と、漢文の聖書はそう理解している。シナの漢語というものは世界一です。非常に含蓄がある。これはもうヨーロッパの言葉はかないやしない。その素晴らしい漢字をへんてこな略し方をしているのはとんでもない話なんだ、本当は。シナでも、今は中国でも少し略しているが、あれはよくない。みんな精神をまちがった。

「我、自然なるもの、自然にして而して然るもの」

と。これは自然法爾の世界。自ずから空々漠々たるが如くして、その神の御意の中に溶け込んでいくもの。キリストがまさに自然法爾者です、イエスが。ヨーロッパ神学なんてやる必要はないよ、なにも。まあ、バルトさんも、ブルンナーさんも偉い神学者だけれども、二人とも最後にやはり聖霊のことに気がつき始めた。そして、

「今まで聖霊を本当に取り扱ってなかったことは我々の欠陥であった」

ということと同じように——もちろん別の表現だけれども——晩年に気がついてるんだ。この自然法爾者、このキリストです。

●ラザロよ出できたれ

41ここに人々、石を除けたり。イエス目を挙げて言いたもう『父よ、我にき

き給いしを謝す。42常にきき給うを我は知る。

と。こういう言葉を、

「あ、キリストはそう仰ったでしょうけれども、ちょっと私には無理だな」

なんて。無理じゃないです、ちつとも。イエスの言葉は全部、私たちにそのまま与えようとしている言葉なんです。

結婚が思う通りにいかないかもしれない。就職が思う通りにいかないかもしれない。けれども、思う通りにいかないような奥に、神さまは何を計っているかわからない。そこを

「聞き給う、信ず」

と言って突破していく。そうすると、その人を通して何が起こるかかわからん。死人をも甦らせるようなことが起こるでしょう。相手を引っくり返してしまう。何もしなくても、何も言わなくても、キリスト教の「キ」の字も言わなくなつて。

「やっぱり、これは違うな」

と。女の方々は少しも悲観することはない。大事なことは、このイエスを本当に受けとつているということ。誰が何と言おうと絶対に負けませんよ、その点で。いいですね。

信仰というなら、その次元に入らなかつたら、つまらないよね。観念信仰、研究信仰だつ



たら。もうとにかく、あなた方は福音書に酔ってくださいよ。そして、直ちにキリストと同じ次元に入れる。

43 斯く言いてのち、声高く『ラザロよ、出で来れ』と呼ばわり給えば、44 死に
しもの布にて足と手を巻かれたるまま出で来る、顔も手拭にて包まれたり。

イエス『これを解きて往かしめよ』と言ひ給う。(ヨハネ11・1〜44)

これはレンブランチの素晴らしい絵がある。まず、驚くべきひとです。根源現実で既にもうこの魅りをちゃんとキリストは受けとっている。神さまの本願に完全にのつかって、『ラザロよ、出で来れ』

と。これは凄い言葉ですよ。もの凄い力が入っている。キリストの全存在がこの言葉の中に全部投入されているような言葉です。愛の本願なんていうものは烈々たるものですから。愛するとは、相手を救いあげることである。その他に本当の愛はない。担いあげ、救いあげ、助けあげる。この「あげる」が大事なんです。

そして、包帯を解いて往かしてしまつた。まあ、パリサイ人だの祭司、宗教家なんか全く、このキリストの前には、ユダヤ教は完全に敗北です。

福音書のこのキリストを見て、これをメシヤとしないで、今でもユダヤ教徒はキリストを受けとらないということは、一体どういうことか、ユダヤ人というのは、本当に頑なな民だね。イスラエルなんてものは。律法そのものみたいだ。ところが、律法は、本当は福音が隠されていたことを知らない。

そのような三つの復活の事態。キリストが私たちを死から本当の生命に甦らせる。今、現に私たちの相対的な「信仰なき我」なんていうものは「生ける屍しかばね」みたいなものだ。それを本当の生命の中に、いつも私たちはキリストに、

「目覚めよ、起きよよ」

と呼ばれて、永遠の生命の中に甦らされて生きていく。毎日毎日が甦りですよ。毎日毎日が復活節だ。今日ばかりではない。毎朝毎朝、復活節。眠りという、死のごとき眠りから朝目覚めるのは、死から生への転換だよな。

●エマオ途上のキリスト

今度は、ルカ伝24章にいきましょう。エマオ途上のキリストという、これは有名なところですよ。人生は旅のごとし。我々は一人で旅することもあるし、幾人かで旅することもあるし、二人で旅することもあるしいろいろある。一人であろうと、二人であろうと、三人であろうと、何人であろうと、我々の人生は旅である。やがて次の世界に行くところの旅である。

それで、旅で歩いていると、ここに大事な言葉がある。

13 視よ、この日二人の弟子、エルサレムより三里ばかり隔りたるエマオとい
う村に往きつつ、14 凡て有りし事どもを互に語りあう。15 語りかつ論じあう程



に、イエス自ら近づきて共に往き給う。

「イエス自ら近づきて共に往き給う」

という言葉です。キリストは近づいてくる。「主よ御許に近づかん」という讃美歌があるね。けれども、「主よ御許に近づかん」でなくて、

「主は我らに近づき給う」

というんだ。そういう讃美歌を作るといいよ。あの譜でもってそういう讃美歌をひとつ作ろうかな。我々の讃美歌も少し作っていかなくてはね。

主は近づいてくださる。うれしいね。こっちは気がつかないのに、キリストの方から近づいてくださる。「キリストはどこにござるか」なんて、こっちから捜すのではない。向こうから近づいてくださる。寂しかろうというわけですね。だから、一人でいても寂しくない。キリストは近づいている。この二人は、イエスが十字架で死んでしまったというわけで、

16されど彼らの目遮えられて、イエスたるを認むること能わず。17イエス彼ら

に言い給う『なんじら歩みつつ互に語りあう言は何ぞや』

一体、何を語っているのかと。「とうとうあのイエスという人は散々みんなにけなされて、十字架にかかって死んでしまったが、どうにもならんね」なんてやっていたのだろうな。

かれら悲しげなる状にて立ち止り、18その一人なるクレオパと名づくるもの

答えて言う『なんじエルサレムに寓り居て、独り此の頃かしこに起こりし事

どもを知らぬか』

と。近づいたキリストに、「あんたはこの頃の最大のニュースを知らないか」というわけだ。「どんなことだね」なんて、とぼけている。

19イエス言い給う『如何なる事ぞ』

と。こういうとぼけ方をしたいものだね。

答えて言う『ナザレのイエスの事なり、彼は神と凡ての民との前にて、業に

も言にも能力ある預言者なりしに、20祭司長ら及び我が司らは、死罪に定め

んとて之を付し遂に十字架につけたり。21我らはイスラエルを贖うべき者は、

この人なりと望みいたり、

とんでもない見当違いをしてしまったと。

然のみならず、此の事の有りしより今日のはや三日めなるが、22なお我等の

うちの或女たち、我らを驚かせり、即ち彼ら朝夙く墓に往きたるに、23屍体

を見ずして帰り、かつ御使たち現れて、イエスは活き給うと告げたりと言う。

24我らの朋輩の数人もまた墓に往きて見れば、正しく女たちの言いし如くに

してイエスを見ざりき』

墓が空しくなって、天使がいたということだけはあっても、本当にキリストにでっくわしたのは、マグダラのマリヤが一番先だった。



25 イエス言い給う『ああ愚^{おろか}にして預言者たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍^{おろ}き者よ。26 キリストは必ず此らの苦難^{くるしみ}を受けて、其の栄光に入るべきならずや』

「私は」と言わないで、あいかわらず、「キリストは」と二人称で言っている。そういうことがわかりませんか。旧約聖書は——キリストはみな自分に追随している——さきほどの、キリストに焦点しているところの光であると思つて、みな読んでいるからね。だから、旧約の預言、旧約は全部、キリストに焦点を結んでいる。我々が旧約を読むときには、この焦点から読まなければダメです。イエスの光をもつて旧約聖書を読めば、楽に読めてくる。お伽話がお伽話でなくなってくるんです、お伽話やお伽話的な神話でも。大体、聖書の神話といったって、みな何らかの意味における事実が背景となつている。やつとそのことがたくさんの発掘によつてだんだん分かつてきた。それから、口承というやつがばかにならない。昔の人は本当に口伝えでやっている。日本の古代のものもそうだけれども、よく覚えてる。そこにいろんなものが付け加わることもあるけれども。

27 かくてモーセ及び凡ての預言者をはじめ、己に就^つきて凡ての聖書に録^{しる}したる所を説き示したもう。

これは大変なものだ。「凡^{すべ}て」といつたつて、もちろんその重点だけでしようけれども。それですつかりその言葉に動かされてしまつて、

28 遂に往く所の村に近づきしに、イエスなお進みゆく様なれば、29 強いて止めて言う『我らと共に留まれ、

「メネイン」という、「宿る」という字です。

● イエス見えすなり給う

時夕に及びて、日も早や暮れんとす^{すなわ}乃ち留らんとて入りたもう。30 共に食事の席に著^つきたもう時、

一緒に夕食を食べようというわけだな。夕方のいかにも何ともいえない光景を思い浮かべますけれども。

パンを取りて祝し、

おそらく種入れぬパンでしょうね。

擘^さきて与え給えば、31 彼らの目開けてイエスなるを認む、而してイエス見えすなり給う。

キリストがパンを裂くその動作をかつて見て知っていたから、ハツと思つただんな。とんでもない旅人だなんて。ところが、見えなくなつてしまった。それからあとで道でもつて、

32 かれら互に言う『途^{みち}にて我らと語り、我らに聖書を説明し給えるとき、我らの心、内に燃えしならずや』



「非常に心が何かしら燃えてしまったじゃないか」

と。開眼。眼が開けた。眼が開けたから、イエスであることに気がついた。気がついたら、イエスは姿を消してしまった。どこに消したかというところ、実は彼らの心の中に姿を消してしまった。彼らはそのことを知らない。

「イエスは近付いて、一緒に歩いて、とうとう中に入ってしまった」というわけです。近付いて一緒に歩いて中に入った。あなた方、うちなるものが見えますか。我々は自分の顔すら見えない。鏡を見れば見えるかもしれないが、蟹みたいに目玉が出てはいしから。自分の顔をついに生涯、実は直接に見ることは誰でもできない。鏡で知っているだけのなし。写真で知っているだけのなし。

内なる世界はもつと分らない。ところが、一番分らない世界が一番分かるんです、これが。相手を見ているよりも、内なる世界が一番はつきりと内観できる世界。私たちがキリストを御霊において受けとっているその事態は、世界中の人が何と言おうが、これを否定することができないという確かさが、この世界です。それだけの確かさを持たなかったら、それは信仰ではないんだ。信仰ほど確かな世界はないんです。非常に逆説的なものです。ここにある花を見ているのは、あるいは錯覚かもしれないけれども。この花を見て、この花が私の心の中に本当に花咲いたら、この花は萎んでもいいよ。

「ああ、切り花はせつかくいいんだけど、またそのうちに萎んでしまうな」

なんて、情けない顔する必要はない。その素晴らしい切り花の姿を自分の中に宿してしまえばいい。

聖書もそうですよ。この聖書の文字をくらってしまおう。食べてしまおう。

「私は聖書は要りません。聖書はみんな私の中にありますよ」

ということになったら、これが最高の世界なんだ。

●キリストは近付いて一緒に歩いて中に入る

ドイツでは、教会に聖書が置いてあるものだから、聖書を持たないで教会へ来ていたけれども、ああいう親切はちっとも親切ではない。本当は不親切にあの所に聖書なんか置かない方がいい。

「自分で聖書を持って来ないぐらいなら教会に来なさんな」

と。私ははつきりそう言ったですよ、ドイツで。

「なんで聖書を持ってこないか。聖書は我々の生命の延長ではないですか」

と、私は牧師に言ったんだよ。それを、

「プロフェッサー小池がそう言った」

と牧師さんが壇上で言ったけれども、あいかわらず持って来なかったよ。ダメだよ。私は遠慮なく言うからね、本当のことは。



私はこのボロボロの聖書は大好きなんだ。私をもっと記憶力がよければ、私はこの聖書は要らなくなるんだけど、私は記憶力がわるいものだから、しょっちゅう持つてなければならぬんだけど。しかし、大事な句くらいは心の中に刻んであります。とにかく、生ける文字となつて、自分自身が即ち活字となつて、

「もう聖書と我とは一つなり」ということに。身につけていることが一番大事です。「身」という字が非常に大事な字です。全身で身読、からだで読む。

そんなわけで、近付いて一緒に歩いて中に入る。これがエマオ途上のキリストというわけだ。近付いて、一緒に歩いて、中に入る。ところが、この二人は中に入ったキリストは知らないんだ。これは聖霊を受けるまではダメなんだよね、中に入つても。

33 かくて直ちに立ちエルサレムに帰りて見れば、十一弟子および之と偕なる者あつまり居て言う、³⁴ 『主は実に甦えりて、シモンに現れ給えり』

キリストは中に入ったかとおもうと、今度はちゃんとあつちの方にも行っている。もうこれは自在ですよ。自然法爾の世界はそういうんだ。同時にあつちこつちに現れた。同時に我々の願いをみんな聞いていらつしやるという不思議な世界だから。

●平安なんじらに在れ

³⁵ 二人の者もまた途にて有りし事と、パンを擘き給うによりてイエスを認めし事とを述べ。³⁶ 此等のことを語る程に、イエスその中に立ち

彼らの中に立った。けれども、キリストは彼らの心の中にちよつと自分が入つてらつしやつても、彼らはそいつを本当にまだ受けとつてないけれども。

『平安なんじらに在れ』と言ひ給う。

この「平安なんじらに在れ」という、平安が本当に私たちの中にあるときには、キリストが入つてなければ平安はないんです。これは聖霊が来なければできないんだ、本当の意味で。ただ、キリストが「平安なんじらに在れ」と仰つたつて、本当の平安は、まだ約束されているだけであつて、まだ現実ではない。イエスはそんなことは分かつていらつしやる。平安というのは、どんなに運命環境がどのように荒れ狂おうが、どんなにマイナスのうにみえようが、ここは天国である。地獄の中の天国だよな。煉獄の中の天国。ダンテはそこまで書けなかった。まあ天国に似たようなところはちよつと地獄の何か所にね、ギリシアの賢人たちのところがちよつとあるけれども、あれはまだ仮天国みたいだ。

本当の天国的平安というものは、そこが地獄であろうが、煉獄であろうが、そこが天国であるところが平安。これはキリスト。キリストがあるところ。こうなつたらもう自在であります。どうぞ、私たちはこの平安という、

「キリストがわがうちに在りたもう。われはキリストの中に在る」



とパウロが言った、あれが本当の平安の世界。力があるんです、もの凄く。これはもの凄く力強い大生命の世界です。大生命の現実ですから。天的な愛だとか、光だとか、生命が漲り溢れているような世界です、この平安というのは。

それくらいキリストが慕わしくなりましたか。私は無教会にいたときに、キリストというのほそういうように受けとれなかったよね、なにかおつかなくて。しゃっちょこぼってしまつてね、こつちが。ただ少し感情的に、ロマンチックに受けとるくらいなはなしで、本当の現実でない。

これが「平安なんじらに在れ」というのを、私はキリストを今、この現実以上の現実をこのキリストの言葉に受けとるわけです。それは、今度は使徒行伝の聖霊の世界です。キリストはよくわかつてらつしやるんですよ。だから、ルカ伝の最後にそのことが書いてある。

●我が手わが足を見よ

37 かれら怖じ懼れて、見る所のものを靈ならんと思ひしに、
38 イエス言い給う
『なんじら何ぞ心騒ぐか、何ゆえ心に疑惑おこるか、

騒いだり、うろたえたり、疑つたり、それはダメなんだよな。ところが、よく人間の心にはこういう波がたつんだ。波は立つても、すぐその奥の世界に入ってくださいよ。磁石の磁針は振れても、北を指すように。

39 我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、
靈には肉と骨となし、
我にはあり、汝らの見るごとし』

キリストは、霊骨霊肉を持つている。これは相対的な肉や骨ではない。霊的な、もうひとつ凄く骨と肉を持つている。すぐこれは霊界に消えてしまうような、見えなくなってしまうような、そういうものです。もう再び死ぬことのない骨と肉です。ルカ伝のこのところにくると、神学者も牧師さんたちもみんな躓いてしまうわけだ。それはその霊的な素晴らしい現実が受けとられないものだから。私はちつとも霊的な男ではないけれども——— どういうもんだろうね、これ——— 無理なく受けとれる。

「キリストの現実というものは凄いな」

ということが、私にはもう驚嘆と喜びものだから、受けとらないではいられないんです。ギリギリの最後の世界を受けとらないではいられないんです、私は。

「ここに何かがあるか」と言ったら、お魚を食べてしまった。

40 「斯く言いて手と足を示し給う」
41 かれら歡喜の余に信ぜずして怪しめる
時、イエス言いたもう『此処に何か食物あるか』
42 かれら炙りたる魚一片を
捧げたれば、
43 之を取り、その前にて食し給えり。

一流の神学者たちの会合でこのところに来たら、みんな笑ったから、「ああ、そうですか」と、私はその次の回からそのグループからサヨナラした。



44 また言い給う『これらの事は我がなお汝らと偕に在りし時に語りて、我に就きモーセの律法・預言者および詩篇に録されたる凡ての事は、必ず遂げらるべしと言いし所なり』

エゼキエル書37章に「枯骨の復活」というのがあったね。日本あたりでは、とにかく死ねば、骨も肉もみんな焼いてしまうな。それは焼けたっていいですよ。霊肉霊体というものは新しく着せられてしまうんだから。霊骨霊肉が新しく生じてくるんだから。キリストに連なる者はそれ以下ではない。それを100%に受けとってください。

受けとらないで済む人はどうぞそのように。私は遠慮ないんだ、そういうことは。聖書のもの凄いやは受けたると、何だかしらんけれども、もの凄いやが来るからしようがない。

45 ここに聖書を悟らしめんとて、彼らの心を開きて言い給う、46 『かく録されたり、キリストは苦難を受けて、三日めに死人の中より甦えり、47 且その名によりて罪の赦を得さする悔改はエルサレムより始まりて、もろもろの国人に宣伝えらるべしと。48 汝らは此等のことの証人なり。49 視よ、我は父の約し給えるものを、

聖霊を、

汝らに贈る。汝ら上より能力を著せらるるまでは都に留まれ』

留まつて祈つていろと。

「私が受けとつていたこの神の霊、聖霊を受けとるまではどうにもならんぞ」

というわけです。私たちの最初に受けとるものは、何といても、十字架です。自分自身がどうにもならないやつなんだな。いくら悟つたつて、いくら諦めたつて。諦めをたてるには、ある意味においてはいいですよ、仏教の世界にはおおいにそういう面があるから。けれども、それは本当の現実からは少しやはりズレている。本当の創造的な、生命的な、この現実というものは。

● 十字架と円現

大体、自然界はどうですか。この太陽系、またたくさん銀河系みたいな宇宙がたくさんあるというんですよ。もの凄いやエネルギーの相引き合っているところの、また、ある意味で離れているという面もあるらしいけれども、そういったもの凄いやエネルギーによって構成されているものですか。とうてい人間に考えられないね。太陽が地球を引っばっているエネルギーなんてものは。もう不思議でしょうがないね、この自然界の事態は。いわんや、しかもそれは非常な法則で、毎年毎年こうやってグルグルグル、地球は回転しながら公転している。この回転がもし乱れたら、もう地球はどこかへすつ飛んでいつて、全部おしまいだ。そういったエネルギーにおいて動いている実世界でありますけれども。

我々のこの生ける存在というものは、霊的なエネルギーによって動いているに相違ない



んです。だから、キリストという方は、イエスというひとは、本当に神の、エネルギーで、神の大生命において、その中に自分を突入されて生きておられた。祈りというのはまさにその世界にいつも自分を投じていることです。投入していることです。

でありますので、我々がもうキリストと一、如の世界に、キリストと一つの世界に入る。それはどうしたらできるかという、これも非常に簡単なんで、その道をちゃんとキリストが十字架で開いている。

「お前の方に、いろんなものが妨げになっっているだろう。そんな妨げは心配いらん。

自我という妨げは全部、私が十字架ですつ、飛ばしたから、心配するな」

「はいっ」

と言うよりかしようがないんだ。

「でも、こうです」

なんて言ったらダメなんだ。そうしたら、つかかかってしまうだけだ。もう無条件に「はい」と言っ受けてとつていく。現実の自分がどうであるかどうであるかというのは問題でない。いいですか。十字架で解決されていない自分というものはひとつもないんです。どんなに矛盾構造であろうと何であろうと構いやしないよ。本当にキリストの十字架を受けとつてごらん下さい。そこからは本当の統括が出てくるから、もの凄い今度はハーモニーの世界が出てくる。

それで、私はここで特に今日は、聖霊を「円」をもって書く。黄色い円で。キリストに十字架されてしまうと、

「さあ、祈り待っている。私の中に入ってこい。そうしたら、お前は本当に円現するぞ」

と。「円現」という言葉が非常に好きだ。描き得る最高の姿は円である。だから、日本の国旗は世界で最高だと言う。国旗において象徴されるところの実存体というものはもの凄いものだ。「心に太陽を持って」という。

「心に、霊なるキリストの、聖霊の太陽を持って」

ということですよ。

●「主さまー」の一言

十字架されたところには必ずもう無条件に御霊が臨んでくる。

「主さまー」

と一言祈れば、直ちにその中に入る。「南無妙法蓮華経」や「南無阿弥陀仏」よりか速いよ。「主さまー」というのは一番簡単だ。「主よ」と。キリストも「父よ」だった。

「アッバー！」

と、一番簡単なんだ。キリストが「アッバー」と言われたら、もう直ちにその世界に入る。



「祈りたることは聞かれたりませよ」

という。何が聞かれたかというのと、

「一番素晴らしい、神さまを受けとったことが即ち、聞かれたりということ」

神さまだけ、キリストだけ、受けとつてごらんよ。そうしたらもう、内容はどうでもいいよ、どうなつても。

「私はあなたを受けとりましたから、もう私の願いは全部聞かれています。どうな

つてもいいです」

と。そうすると、キリストは凄いことをなしていらつしやる。行き詰まっても行き詰まらない。豁然かつぜんとして開かれていく。本当ですよ。それを、

「そうだろうか。こういう場合はどうだろうか」

なんてやっていたら、いつまでたつても始まらない。

皆さん、ダメなやつほど凄くなるんですから。

「私はダメだ!」

なんて、さじ投げることはひとつもないですよ。

「善人が救われる。いわんや悪人においてをや」

という。能力あるやつが仕事ができる。いわんや能力ないやつはいよいよよできる(笑)。それはキリストがそう言つたじゃないですか。

「われ何事もなしあたわず」

とキリスト自身が無能者なんだ。そうしたら、キリストは神さまがすべて彼を通してなした。

「われ何事も教えるあたわず」

と。キリストは何でもしゃべつた。それがさつきの自然法爾じねんほうにという世界なんです。これは次元が高いはなしたが、実は一番本当は簡単な世界なんです。誰でもが入れる世界です。

そういう、キリストの御霊が本当に宿る。聖霊の中に入り、聖霊が宿る世界に入れてこそ、初めて大生命であつて、もうキリストの「復活節」なんてちゃんちゃらおかしいよ。キリストの大生命は、十字架を通れば、もうキリストは甦らざるを得ないのでね、改めて言う必要はなにもない。それをしかし、弟子どもも誰もみんな本当に受けとらなかつた。情けないもんだよ、人間なんてものはね。だから、イエスというひとがいかに桁ちがいのひとであつたか。このひとでなければ救いはないということがはつきり分かる。まず、32、33歳で地上の生涯が終つたひとですよ。

え? 私なんか160歳くらいまで生きなければどうにもならない。160なんてことをなぜ言つたかというのと、「半寿」の祝いというのがある。シナでは160歳が長寿で、その半分の80歳が半寿というから。

